

# つち だ 田 遺 跡

## 調査の概要

土田遺跡は五条川下流域の自然堤防帯に展開する古墳時代から中世にかけての遺跡である。すでに昭和56年度から61年度にかけて名古屋環状2号線建設に伴い発掘調査が行われている。今回の調査は水質障害対策事業にともなうもので昭和56年度に調査された地区の延長部分に当たる。調査区はほぼ南北に環状2号線をはさんで幅約3.5M、長さ約270Mにわたって設定された。

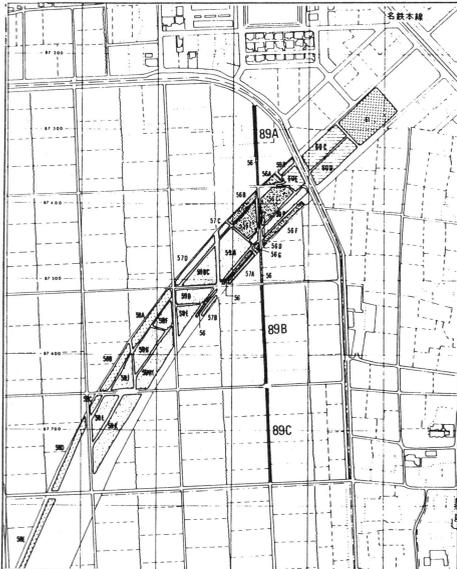
**A区** 道路及び水路による攪乱のため遺構の残存は悪かったが、南北に走る中世の溝や土坑・ピットがいくつか見つかった。遺物は青磁、灰釉系陶器、小皿、常滑甕などである。

**B区** 遺構の残りが比較的よく、中世の井戸5基、東西に走る溝十数条、土坑、ピット及び古墳時代初期の土坑が検出された。中世の井戸は曲物が埋められ、なかにはSE01のように木枠がはめられているものもあった。溝のなかからは灰釉系陶器、小皿、常滑大甕、土師皿などが出土している。古墳時代の土坑は中世の溝に切られておりはっきりしないが、溝もしくは古墳になる可能性もある。土坑のなかからは土師器壺などが出土している。

**C区** 調査区の北半分からは井戸1基、溝数条、土坑、ピットが見つかったが、南にいくほど標高が下がり、南半分は暗灰色の粘土が堆積し湿地状になっていた可能性がある。

**まとめ** 今回の調査は幅が狭かったが長さが南北約270Mにわたっていたため遺構の広がり方を知る上で有効であった。調査区の中央部では中世の井戸や南北方向の溝が幾つも発見

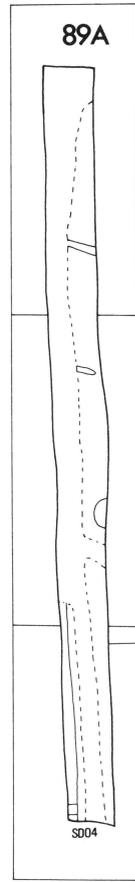
され集落の存在を想定させるが、南端部は湿地状になり中世の方形の土坑が散在するのみである。  
(城ヶ谷和広)



第1図 調査区位置図

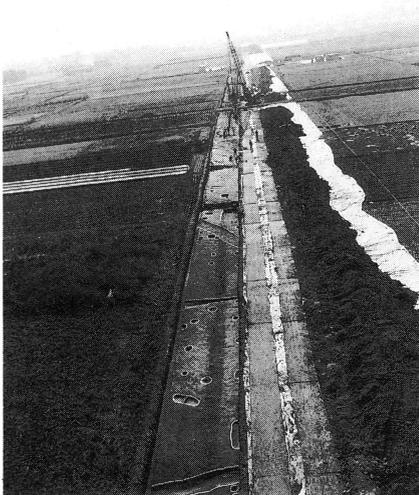


B区 SE01



Y = -30,675

第2図 遺構図 (1/120)



B区 近景 (北より)

